

北部保健所 所長 糸数 公 先生



広報委員 天願 俊穂 先生

北部保健所 所長 糸数 公 先生

天願先生＞ コロナ禍の中、保健医療介護部長に就任し今年の3月までの部長職、お疲れ様でした。そして、4月から北部保健所所長就任おめでとうございます。今日は、北部保健所所長としてインタビューに答えていただきますが、併せて保健医療介護部長時代のこともお聞かせいただけたらと思っています。よろしくお願いします。

まず、先生が行政の道に進まれたきっかけと、これまで医療行政で大切にしてきたことをお聞かせください。

糸数先生＞ 自治医科大学を卒業後、離島の診療所で勤務したことが、行政の道へ進む大きなきっかけになりました。

離島の診療所では、島の皆さんの日常生活がよく見えます。診療所を受診されるのは比較的元気な高齢者や、熱を出した子どもたちが多い一方で、働き盛りの世代はほとんど受診されま

せん。しかし、そのような方々が高血圧などを放置したまま突然倒れ、救急搬送される場面を何度も経験しました。

その経験から、「診療所で患者さんを待っているだけでは健康は守れない。予防に取り組むことが重要だ」と強く感じるようになりました。

そこで予防や健康づくりに携わりたいと考え、保健分野へ進みました。当初は具体的なイメージがあったわけではありませんが、健康教育や健診事業などに携わる中で、働き盛り世代の健康課題が見えてきました。

県庁では2013年から「健康長寿復活プロジェクト」を進め、2040年の平均寿命日本一を目指して県民の健康づくりに取り組んできました。健康づくりは、県民一人ひとりの行動変容が必要であり、成果が出るまでには時間がかかります。現時点では十分な成果が出ているとは言えませんが、長期的に継続していくことが重要だと考えています。

県内2紙の死亡広告を分析して、働き盛り世代がその親世代を残して、先に死亡する家庭が増えていることを、マスコミ等に発表して、県民に健康づくり、生活習慣病重症化予防の重要性を訴えることもしています。

沖縄県医師会には、プロジェクト開始当初から大変ご協力いただき、「65歳未満健康・死亡率改善プロジェクト」や県医師会主催の「うりずんフェスタ」などの取組を継続してきました。こうした取組を継続していくことが、田名会長がおっしゃっているように、県民一人ひとりの健康に対する考え方や健康リテラシーの向上につながり、その積み重ねが少しずつ健康状態の改善につながっていくのではないかと考えています。

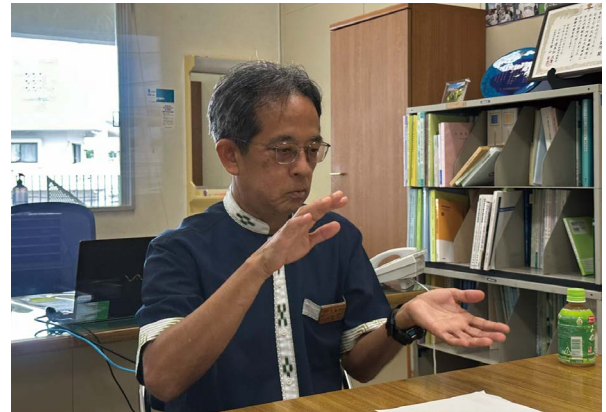
天願先生> コロナ禍では、毎日のように記者会見に臨まれていました。当時、特に心掛けていたことは何でしょうか。

糸数先生> 沖縄県で最初の感染者が確認されたのは令和2年2月14日金曜日でしたが、その翌週の月曜日から毎日記者会見を行いました。

当時は情報が錯綜し、県民の皆さんも非常に不安を抱えていました。そのため、「公式な情報は毎日この時間に発信する」ということを徹底し、マスコミの皆さんにも「午後3時には必ずここへ集まってください」とお願いしました。

私が持っている情報はできる限りすべてお伝えし、記者の皆さんからの質問にも丁寧に答えました。感染者が一時的にゼロになった時期には、会見を休もうかとも考えましたが、逆にマスコミから「検査件数や新たな動きも知りたいので続けてほしい」と要望があり、その後も継続し、結局2年余り記者会見を担当しました。

新しく担当になった記者にも一から説明し、「県民に伝えてほしいこと」をしっかりと共有することを意識しました。毎日同じ時間に、同じトーンで情報を発信し続けたことが、県民の安心につながったのではないかと考えています。



天願先生> 一方で、ご苦労や失敗したと感じたことはありましたか。

糸数先生> もちろん、失敗もたくさんありました。

一番印象に残っているのは、十分な庁内調整を行わないまま記者会見で話した内容が、その日のうちにニュースになり、翌朝の新聞で上司が初めて内容を知るということがあったことです。

どの組織でも同じだと思いますが、情報発信の前には組織内での調整や手続きをしっかりと行う必要があります。その点については何度も反省し、改善を重ねながら進めていきました。

天願先生> 医師として行政に携わることに、どのような強みがあると感じていますか。

糸数先生> 医師会をはじめとする専門団体には、先輩・後輩など多くの知り合いがあり、普段から相談しやすい関係があります。

現在の医師会長とも以前から面識があり、お互いの立場や考え方を理解しながら話を進めることができます。「こういうことで困っているのだな」ということも比較的理解しやすく、その点は医師出身ならではの強みだと思います。

一方で、事務職の方々にも大きな強みがあります。医療の専門知識はなくても、法律や制度に基づいて冷静かつ客観的に判断し、「これは制度上できません」と明確に判断できる場面があります。

医師だから良い、事務職だから良いということではなく、それぞれに長所と短所があります。場面に応じて、お互いの強みを生かしながら仕事を進めていくことが大切だと考えています。

天願先生> コロナ禍では、ほぼ毎日のようにテレビでお見掛けしていました。当時、街中で声を掛けられることも多かったのではないのでしょうか。印象に残っているエピソードがあれば教えてください。

糸数先生> はい、ありましたね。最近でも銀行へ行った際に、「テレビに出ていましたね」と声を掛けていただくことがあります。

コロナ禍当時は、買い物などでも、「お疲れさまです」「頑張ってください」と励ましの言葉をいただくことが多く、本当にありがたかったですね。

また、家族の協力には本当に助けられました。当時は、自分が体調を崩すわけにはいきませんでしたし、家族が風邪をひいても仕事に大きな影響が出てしまいます。そのため、家族も感染予防を徹底し、外出を控えるなど、本当に協力してくれました。そうした家族の支えがあって仕事ができているということは、常に忘れないようにしていました。

私はお酒が好きなのですが、県民の皆さんに外での飲食を控えていただくようお願いしている立場でしたので、自分自身も一緒に我慢しようと思い、外で飲むことは控え、コンビニで買って家で楽しむ程度にしていました。

それでも、近所へたこ焼きを買いに行った時に、「頑張ってください」「いつも見えています」と声を掛けていただいたことがありました。県民の皆さんからいただいたそうした温かい励ましの言葉は、とても印象に残っています。

天願先生> 素敵なエピソードですね。ありがとうございます。

続いての質問ですが、県全体の医療行政を担う立場から、今後は北部保健所長として地域医



療に携われます。立場が変わることによって見えてくる課題や、北部地域の可能性についてどのようにお考えでしょうか。

糸数先生> 県庁では、医療計画や地域医療構想など、必要な病床数や医療提供体制を数値に基づいて計画することが主な役割でした。しかし、実際に保健所へ来て医療機関の皆さんと話をすると、その計画を現場で実現することがいかに大変かということを改めて実感しています。

例えば、病床を確保するためには、医療機関ごとにさまざまな事情があります。現場の声を聞きながら、「この体制では難しい」「こういう支援が必要だ」といった課題を県へ伝え、計画と現場をつなぐ役割が保健所には求められていると感じています。

県庁にいた頃は、現場と直接話す機会は限られていましたが、保健所では地域の先生方と定期的に顔を合わせ、率直に意見交換ができます。そのような対話を重ねながら、地域医療構想なども、より実効性のあるものにしていきたいと考えています。

北部地域は、20年前に県立北部病院の産婦人科が一時休止となり、出産のために中部まで行かなければならない状況がありました。現在も専門医が少ないことや、広い地域に医療機関が点在していることなど、北部ならではの課題があります。

だからこそ、地域の実情を丁寧に把握しながら、医療機関や行政が連携し、住民が安心して

医療を受けられる体制づくりに取り組んでいきたいと思っています。

天願先生> 北部地域は県内でも高齢化が進んでいる地域です。今後の地域医療や介護連携について、どのような課題や可能性を感じていらっしゃいますか。

糸数先生> 沖縄県全体では、これからさらに高齢化が進んでいきますが、その中でも北部地域は一足早くその課題に直面しています。

今後は、高齢者が入院した後、回復期医療を経て在宅へ戻るまでを切れ目なく支える仕組みづくりがますます重要になります。そのためには、医療と介護の連携が欠かせません。

一方で、介護は市町村が主体となって担う分野であり、取組状況には地域ごとの差があります。介護サービスの体制が十分でない地域では、住み慣れた地域で生活が続けることが難しくなる可能性もあります。

そのため、保健所としては、市町村や医療機関と連携しながら地域の課題を共有し、必要な支援や調整を行っていくことが大切だと考えています。県が担う役割と市町村が担う役割をつなぎ、地域全体で支えていく体制づくりを進めていきたいと思っています。

天願先生> ありがとうございます。

長年、医療行政と地域医療の双方をご覧になってきた立場から、これから地域医療や公衆衛生に携わる若い医師へ伝えたいことがあればお願いします。

糸数先生> 私自身、離島診療所での勤務を通して、「診療だけでは地域の健康課題は解決できない」と感じたことが、公衆衛生の道へ進むきっかけとなりました。

また、小児科研修では、NICU で退院を支援した子どもたちが、その後、発達支援施設で生活している姿を目の当たりにし、医療は病院の中だけで完結するものではなく、退院後の生活

や地域まで見据える必要があることを強く実感しました。

現在も医学部で講義を行い、保健所や県庁での仕事について学生に伝えています。多くの学生は「保健所がこんな仕事をしているとは知らなかった」と驚きます。医療行政や公衆衛生は、県民全体の健康を支える大切な仕事です。

若い先生方には、まず臨床医としてしっかり経験を積んでいただきたいと思います。その上で、患者さん一人だけを見るのではなく、その人の家庭や地域、職場といった背景まで考える「公衆衛生的な視点（パブリックヘルスマインド）」を持ちながら診療に当たっていただければと思います。

行政に携わるタイミングは人それぞれですが、そのような視点を持つ医師が増えることが、これからの地域医療にとって大きな力になると期待しています。

天願先生> 若い医師が医療行政の道へ進む場合、臨床経験はどのくらい積んでから行政に携わるのが望ましいとお考えですか。

糸数先生> 政策づくりを専門に極めたいということであれば、初期臨床研修を終えた後、早い段階で厚生労働省などへ入り、国の政策を学ぶという道もあると思います。

一方で、私自身はそのような考えではありませんでした。自治医科大学卒業後に離島医療や地域医療を経験し、多くの先生方とのつながりを築くことができました。その経験や人とのつながりは、県庁で仕事をするうえで非常に大きな財産になったと感じています。

行政へ進むタイミングに正解はありません。初期臨床研修修了後に進む方もいれば、40代、50代になってから行政へ携わる方もいます。それぞれのキャリアや志向に応じて選べばよいのではないかと思います。

天願先生> 先生が考える地域医療や医療行政において最も大切なことを教えてください。

糸数先生> 一番大切なのは「信頼関係」だと思います。医師と患者さんとの信頼関係はもちろんですが、地域住民と医療機関との信頼関係も非常に重要です。特にコロナ禍のようなパンデミックでは、「この病院なら安心して任せられる」という信頼があるかどうかで、住民の受療行動も大きく変わることを実感しました。

県立や公立、そして民間の病院だけでなく、クリニックのレベルまでそれぞれの医療機関が地域住民との信頼関係を築いていくことが、県民全体が医療に対する信頼感、安心感を得ることにつながると思います。

また、行政に携わる医師には、さまざまな立場の人の意見に耳を傾ける姿勢も欠かせません。一人で判断するのではなく、多くの人の意見を聞きながら調整し、より良い方向へ導いていくことが、行政に求められる役割だと考えています。

天願先生> 少し話題が変わりますが、先生はマラソンや三線、卓球など多趣味で知られています。趣味にはどのような思いで取り組まれているのでしょうか。

糸数先生> 私は「バランス」という言葉を大切にしています。仕事をしっかり頑張る一方で、趣味の時間も大切にする。その両方を保ちながら生活することを心掛けてきました。

一番長く続けているのは卓球です。中学生の頃に始めて以来、大学時代を経て現在まで続いています。最近では沖縄県医師会の卓球チームの一員として、九州医師会の卓球大会にも参加させて頂いています。

三線との出会いは、離島の八重山の小浜島診療所へ赴任した頃でした。当時、「離島に来た若者は毎日お酒を飲むか、三線を弾くかのどちらかだよ」と勧められたのがきっかけです。それ以来 30 年以上続けてきて、今では職場で初心者向けに三線を教える機会もあります。三線を持っていても弾く機会がなかった方が少しずつ上達していく姿を見るのは、とても嬉しいですね。

マラソンは 45 歳の頃に始めました。当時は単身赴任中で、飲み放題・食べ放題の生活が続



き、体調が気になり始めたことがきっかけです。島のマラソン大会に誘われて参加したことを機に、本格的に走るようになりました。毎月 100 km 走ることを目標にコロナ禍も含めて継続し、気づけば 15 年になります。今振り返ると、この年代で継続して運動できたことは、良かったと思っています。あと何年走れるか分かりませんが、これからも空いた時間を有効に使いつつ続けていきたいですね。

天願先生> ありがとうございます。それでは最後に、このコーナー恒例の質問に移らせていただきます。

沖縄県医師会に対してのご意見・ご要望がございましたらお聞かせください。

糸数先生> 沖縄県医師会には、専門団体として行政へ提言を行うだけでなく、自ら積極的に行動していただいていることに、大変感謝しています。

特にコロナ禍では、「感染予防の啓発活動」や「検査体制の構築」など、あらゆる局面で多大なご協力をいただきました。検査体制の拡充が必要となった際には、多くの先生方が自ら手を挙げてご協力くださり、さらに県のコロナ対策本部へも医師を派遣していただくなど、沖縄県にとって非常に大きな支えとなりました。

近年は、行政への提案に加え、自ら主体的に活動し、大学や行政などさまざまな関係機関を巻き込みながら取組を進めておられることに敬意を表するとともに、大変心強く思っています。

また、県行政と医師会との定期的な意見交換の場も、非常に大きな意義があります。当初は気軽な意見交換の場でしたが、現在では正式な会議として継続され、時には厳しいご意見もいただきながら、県も一つひとつ回答し、互いに率直な議論ができる関係が築かれています。

こうしたオープンな信頼関係は、長年積み重ねてきた大きな財産だと思います。これからも県と医師会が連携しながら、県民の健康を支えていく関係を大切にしていきたいと思っています。

天願先生> 最後に、何かお話ししておきたいエピソードがあれば教えてください。

糸数先生> コロナ禍の裏話として、一つ印象に残っている出来事があります。

沖縄県で最初の新型コロナウイルス感染者を公表したのは、令和2年2月14日（金）でした。その日は報道対応に追われ、翌15日（土）は沖縄県医師会で夜遅くまで会議が開かれました。翌16日（日）には沖縄マラソンが予定されており、会議では「今からでも中止をお願いできないか」といった議論も交わされていました。

実は私自身もその大会にエントリーしていました。会議ではそのことを誰にも言わず、「どうなるだろう」と思いながら話を聞いていましたが、最終的に大会は予定どおり開催され、私も静かに完走しました。いつもなら仲間と打ち上げをするところですが、その日はすぐ帰宅して休み、翌日からは連日の記者会見とコロナ対応が始まりました。今振り返ると、あの日が長いコロナ対応のスタートだったように思います。

また、現在は保健所で勤務していますが、コロナ対応を振り返ることの大切さも感じています。当時、保健所では患者対応や積極的疫学調査、各種事務手続きなどに追われていました。一方、県庁では、病床確保や重症患者の受け入れ体制の維持など、県全体の医療提供体制をどう守るかという課題に取り組んでいました。

それぞれが置かれた立場で全力を尽くしていましたが、お互いの役割や苦勞を十分に共有す



PROFILE

学歴・職歴

昭和59年	県立那覇高校	卒業
平成2年	自治医科大学	卒業
	県立中部病院	臨床研修
4年	県立八重山病院附属小浜診療所	（2年間）
7年	県立那覇病院附属座間味診療所	（2年間）
9年	コザ保健所	医師として勤務
15年	北部福祉保健所	健康推進班長
19年	沖縄県福祉保健部	健康増進課 結核感染症班長
22年	八重山福祉保健所	副参事 兼 班長
25年	沖縄県福祉保健部	健康増進課 課長
28年	沖縄県保健医療部	保健衛生統括監
令和4年	沖縄県保健医療部	部長
8年	北部保健所	所長

資格

社会医学系 専門医 指導医

趣味

卓球（12歳～）、三線（26歳～）、ランニング（45歳～）

る機会は少なかったように思います。そのため、今後に備える意味でも、当時の経験を整理し、職員へ伝える機会をつくることは大切だと考えています。次に同じような事態が起こらないことを願っていますが、万が一に備えて経験を継承していくことが重要だと思います。

天願先生> 本日は、コロナ禍での裏話など、普段はなかなか伺うことのできない貴重なお話を伺うことができました。お忙しい中、インタビューにご協力いただき、誠にありがとうございました。

インタビューアー：広報委員 天願 俊穂